

ハイボールを全部飲めなかったのを、惜しむようなくやしがるような、さらには自嘲するような、そんな一首の調子が持ち味になっている。

頭の芯が宙に浮かぶ日キルキルと回転扉の向かうに  
行きたい 生野由美子

頭痛の歌らしい。幸い私は頭痛と縁がなくこんな気分を味わったことはないが、母がよく、この歌に近いようなことを言っていた気がする。「キルキルと……」以下、なかなか。

秋天を透かせる色に翅ひろげ おほどかなるよ浅黄  
斑は 萩原桂子

遠距離を飛行することで知られるアサギマダラである。ここでは、今、そこを飛ぶ姿に焦点を合わせて特色を出している。「秋天を透かせる色に翅ひろげ……」がスケールの大きい表現で、読者をひきつける。

ピストル型の体温計でみづからの額を撃ちて図書館  
に入る 山本枝里子

新型コロナウイルスのおかげで、図書館の入口では体温を計らなければならない。そんな約束を、できるだけ軽く、やや笑いの要素を入れて表現して成功。

生徒らの指さす向かう七色の滲める虹の根元ありた  
り 西澤孝子

今月の五首、授業や生徒が出て来る作で、中学か高校の教員をしておられる作者らしい。この一首はもとよりのこと、どの作も映像が鮮明でたのしい。

四肢を持つイリコと思へ思ふべし窓の棧にて溜びし

ヤモリ

山口和賀子

干からびたヤモリの死骸を四肢を持つイリコと見た気が合いがポイント。第二、三句「……イリコと思へ思ふべし」のリフレインがうまい。いたずらっ子がなぞりかえずような表現に注目した。こうした童心を大人になっても持ち続けるのはなかなかむづかしい。

抱き取れば吸い寄せられて湯の中はゆらゆらうとう  
と羊水の夢 村井沙津希

喃語に抑揚がつきはじめたという歌がすぐ前にあるから、まだまだ幼い赤ちゃんのお母さんの歌のようである。この世に生まれ出たのを忘れてしまったように、まだ羊水にくるまれている感じで、湯の中で眠っている、というのだ。

マスクして「原爆の子」を語るわれにマスクの子ら  
の瞳まぶしく 美帆シボ

ブルージュというベルギーの町に出かけて行って、原爆のこと、広島のことなどを子供たちに話をされたらしい。あえて「マスク」を一首に二度出して、コロナ感染者の多いフランスの現在を一首に刻印している。

九〇年代のはじめに、オランダからブルージュへ車を運転して出かけたことがあった。三、四泊の小さな家族旅行である。日本以外で運転したことがほとんどない時期で、しかも、車にナビゲーターがついてない頃だったので、地図で道順を見る冊子と喧嘩しながらブルージュの町を右往左往したのを思い出す。頼綱は小学生、定綱はまだ小学校以前だった。